海の寺子屋　第17時限目

「タコとイカの差異」

独立行政法人水産大学校
理事長　鷲尾　圭司

今回は、私たちの食生活に大変身近な「タコ」と「イカ」の違いについて、水産大学校の鷲尾理事長にわかりやすく解説していただきました。

里海にやってくる生きものにタコとイカもある。タコはマダコやイイダコ、テナガダコなどがお馴染みで、マダコは岩礁から砂礫地帯、イイダコは少し泥がかったところ、テナガダコは海岸のがれきの隙間など、微妙に棲み分けている。イカはコウイカ類とアオリイカが藻場を産卵場として利用し、生まれてしばらくは海草の茂み周辺で過ごしている。

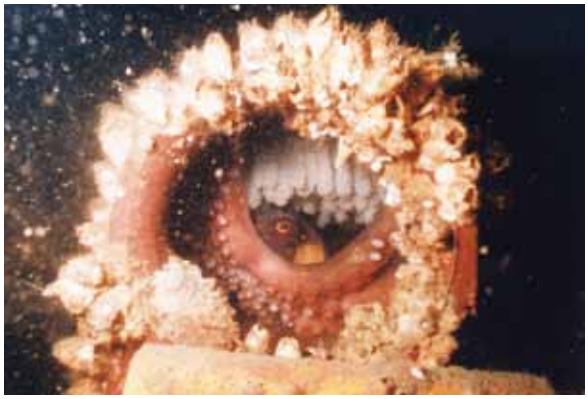
どちらも軟体動物に分類され、先祖は貝の仲間だ。イカを開くと背中に甲という舟型の硬い芯が入っている。骨とは違うように見えるのは、これが貝殻の名残だ。要するに、イカは貝殻を身体の中に取り込み、自分の心棒としてからだを支える装置に変えてしまったものだ。一方タコの方は、それも活動するのに面倒だと貝殻をすっかり退化させて無くしてしまった。

この貝殻の名残が残っているか否かが、タコとイカの違いに大きく影響している。タコは海底をはい回って、時には穴に入って隠れるのに対して、イカは水中に浮かんで暮らす。貝殻を失ったタコは、行動的ではあるが、休みたくなると貝殻に守られていた先祖を思い出し、安心感を求めて穴や壁を求めてしまう。一方のイカは、身体の中に貝殻の名残を心棒として残しているので、他に頼らなくても心の安定を保てるアイデンティティーがあって、平気で浮かんでいられるわけだ。

この違いは、両種の墨の使い方にも影響している。タコが墨を吐くと、それは煙幕となって岩陰に隠れる間をつくる。忍法煙隠れの術だ。しかし、イカの方は水中に浮かんでいるのだから、同じ煙幕では次の隠れ場所がない。そこでイカは墨を塊で吐き出し、自分の姿に似せた影を身代わりとする。敵が影武者に目を奪われている間に半透明のからだを生かしてイカジェットで彼方へと逃げ去る算段だ。だから、タコの墨は分散して広がるのに対して、イカの墨はまとまりやすく粘着質で、見せかけの影がつくれるわけだ。

なるほどイカ墨はパスタに使うとスパゲッティーによく絡むので知られるが、タコ墨を使う例はほとんど聞かない。あまりきれいに仕上がらないのだろう。

このほか、筋肉繊維はイカが縦横に整列して裂きやすいのに、タコは網の目状になってなかなか裂けない。イカはジェット噴射に、タコは柔軟なタコ踊りに特化するせいだろう。また、吸盤を見比べるとイカの吸盤には歯の付いた硬いリングがあるが、タコにはない。獲物を引っかけて獲るか、吸い付いてねじ伏せるかの違いが、こんなところに見られる。よーく観察してみてくださいね。



卵を守るマダコ

水中を泳ぐコウイカ